

海岸通

市中案内
 通一丁目の集産場は見物かたぐいの花客群がり、三村の金物店、大庭の米屋、水野の呉服商、小間物商の長崎屋、履物商の水室、荒物商の立花あり、野菜市も此邊に開かる。一丁目に至り、財部、有村、橋口等の石炭問屋に注文を爲し、實正堂に篆刻の細巧を見、キールン亭に登りて一酌催さんか、樓上の眺望好く料理も口になふ。
 海岸通は一丁目より三丁目に分たる、先づ三丁目より進めば、こゝも石炭問屋の群集せる處、山周、丸又を始めとして、阿部、川村、福永、堤、中村、野中、丸山、谷川、安田、瓜生、重富、戸川、倉田、脇谷、大辻の十七店隣りから隣りへ、日に月に好景氣なり、上野醫院は患者多く、神崎の質屋桂の荒物店、和田の雜貨店、島の荒物店と、も客足繁げし、大坂商船會社支店、石炭倉庫會社あり、小早川はラムネ製造所にして、加藤醫院、洞海埋立事務所あり、洋館の高く岸邊に聳るは三菱會社の支店

石炭業組合

組合の目的

にして、全處より少し西へ向へば、石炭業組合事務所に至らん、全所は昨年石炭問屋同盟と出入船舶取締所を合一したるものにして、全組合は、若松町、石峯村及び戸畑村の石炭坑業者、石炭取扱會社、石炭商、炭石骸炭取扱人及び石炭搭載船舶取扱者を以て組織し、從來の慣行と目下の實況を酌量し、營業上の改良と便益を謀るの目的を以て、船舶の取締、航路の一定、不正炭の取締を嚴にし、水難救護組をも設けて、難破其の他の水災を救護し居れり。

渡場

若松警察署の前に渡場あり、こゝは數多の渡海船ありて、若松、戸畑間の往復頻繁、船頭衆は早朝より夜の十二時迄櫓のこぎ詰め、一日二千人位の往來受合ひなり、之は若松にて町役場、戸畑にて村役場

市中案内

市中案内

中島

の監督に屬し、請負を以て人民の營業に任ず、渡し賃は往復にて僅かに六厘、お安いものよ。

渡船岸を離るれば直に中島に至るべし、全島の歴史を見るに、永正の頃、竹内治郎居城せしが、慶長年間黒田長政入國して後、此の城を改築し、家臣三宅家義をして之を守らしめぬ、然るに、元和元年に及び、幕府命を下だして毀ちたるも、往年鎖國攘夷の説盛んに行はれて更に砲臺を築きなり、今や明治の昭代亦た其の必要なく、果ては石炭貯藏場となり、關西コークス會社のコークス製造所さへ設立せられ、煙突の高さは古松の梢よりたかく、黒煙濛々として吐かれけり、而して東南の岸は船舶の常に碇繋するところなり。

戸畑

製造所
コークス

再び渡船に飛び乗り、數分時にして戸畑の渡場に着く、藤勝出張所

* * * * *

將來有望
なり

馬車人力
倉に至る小

市中案内

を始め、關石炭問屋、竹内履物店、古田料理屋、大森醬油屋、楠本酒屋、楠本荒物店等、いづれも繁昌せり、殊に魚市場の魚類は新鮮潑刺たりと、戸畑の人が威張るところ、お寺は照養寺あり、戸畑尋常小學校は二百六十の生徒を有せり。

戸畑は小倉へ至る要路なれば、若松の刺撃をうけて益す、進歩發達すべく、九州煉化株式會社、九州コークス株式會社も近々こゝに創立せられんとし、尙ほ地域に於て充分の餘裕あるのみならず、製鐵所建設地なる八幡村の往還にあたれば、事業の勃興期して見るべきなり、渡場の上りたてに馬車駐車場及び人力車駐車場あり、風雨降雪の折りは馬車九錢位、人力車十三錢の規定にて一里餘の小倉に至り得べき筈なるも、何時も定格外の賃錢を拂ふ始末となり、殊に日暮か暴風雨の節は四五十錢の賃錢を強談るゝこと多し、然も、

市中案内

目下計畫中なる小倉鐵道にして一朝布設せらるゝにいたらば貨物の運輸は無論旅客の往復に非常の便利を與ふべし、全鐵道創立事務所は若松濱ノ町石富材木店內に設けられ、大阪へも出張所を置けるが、其の資本金は布設線路四哩に對し四十萬圓なり、尤も筑豊鐵道會社は右買受の談判を試み居れば、或は其の手に領せらるゝやも知れず、兎に角急に布設して貰ひたし。

若松のむかひ戸畑の出崎なる名古屋崎は、一帶の白沙青松滴る影の波上に彩り、何れへ向きても眺望よろしく、春は柵引く霞の裡に落潮を逐ふて沙干狩、夏は團扇輕ろく晚涼を擲して散步すべく、秋の夜は月光に浮岩れて虫の音とゝもに波の音を聽きて一句嘯か

製鐵所建設地なる八幡村に往かんには、戸畑渡場わたしばの左手より海岸を傳ふか、又た牧山越しするも興あり、併し、足弱の人は若松辨天べんてん通りの海岸に船を獻ふべし、往復五六十錢、一時間にして葛島の開鑿かいさくを見て枝光橋下えだみつはししたに着くべし、製鐵所は尾倉と枝光との間に建設せらるゝ都合にて、此邊の地價昨今非常に騰貴し、最早市街の區劃さへ爲され、一ト儲の當込みに逸早くも旅館料理屋等の新築せらるゝ、少なからず、いよゝ建設の曉に及はば、數萬の人々急流の如く詰めかけ、若松とゝも繁華の地と變ずべし。

市中案内

黒崎へは流車りゅうしやに便するも、好けれど、折尾驛にて筑豊九州の兩鐵道接続する能はざれば、矢張り、辨天通りの渡場わたしばより行くべし、通常の便船は十錢位の賃錢なれども、借切りは三十五六錢なり、順風なれ

市中案内

ば一時間半にして達すべし、全地のセメント會社は、大仕掛にて、日々の製造巨額に上り、利益配當も可なりでありと云ふ、昔し京、大阪への行客は、黒崎より船出し、九州筋の諸大名も、此處に來りて、順風吉日を卜し、江戸參勤を爲せしゆゑ、筑前の名邑として繁華熱鬧の地なりしも、今はますます衰色あり。

蘆屋へは陸路五里、氣樂に行かば、先づ筑豊鐵道の便をかりて折尾に出で、此の驛より九州鐵道に投じ、瞬くうちに、船の通路なる遠賀川の鐵橋を越へ、遠賀川驛に下車して、一寸一喫煙、それより腕車を働へば、一時間にして達すべし、車賃は、大約二十錢、全地は遠賀川の河口、玄海洋のほとりに在る繁華の處、郡役所、稅務署、郵便電信局ありて、若松が未だ盛況を見ざる頃迄は、筑豊の石炭十中の八九、此處

に集散せられ、白帆張れる船も、上流下流、連続せしに、今日は、一年漸く三百艘位の船上下するのみ、其の繁華の度も、いよく降り。

小石へは距離わづかに半里、若松は、的野精米所通り、松のなみ木を添ふて行く十町、若松避病院より左に折れて進むべし、小田の岬、十三塚を右に見て、間もなく達すれば、此處は玄海洋の浪打寄するところ、土地清潔にして、幽閑、最も避暑に適す、陰曆月の十七、十八兩日は、小石觀音の賽日にして、若松より參詣するもの多し、小石より磯傳ひ行くこと一里半、小灣に臨んで、一小部落あり、脇の浦と稱し、漁家多く、婦女の若松に出で、魚鬻ぐもの亦た尠なからず。

市中案内

* * * * *

市中案内

お負けに、そんなじよそこらのお手引いたさんに、折尾驛は筑豊九州
 兩鐵道の交叉する處停車場の宏壯なる他に其の比を見ず、東西南
 北より來れる、乗客の此處より往復又た乗換するは無論貨物の集
 散、非常に多く、黒田家千古の遺業たる堀川運河は、上下の船晝夜絶
 ズ、之が紀念碑遠からず此に建設せらるゝに確定せり、其の費額は
 五千圓なり、又た一二の運輸店もあり、茶屋、旅宿は更なり、總ての民
 家も月に年に繁榮の色を現はしつゝあり、眞に四通八達の場處な
 れば、早晩郡衙を始め公共的建物の續々建築せらるゝを見ん、直方
 は若松より鐵路十五哩餘、炭坑の景氣に伴ひ繁華の地たり、多賀神
 社は直方停車場より數丁丘陵に據りて祀られ、陰曆十月十五日の
 大祭は若松姪子祭に劣らぬ賑にして諸方より參詣多く、市なども
 盛に張らるゝゆゑ、筑豊鐵道は臨時涼車を發することあり。

市中案内

折尾驛より九州鐵道上り列車に投じ小倉に向ふ、此處は小笠原氏
 の舊治にして、今は西部都督府には師團旅團の設けあり、紫川中央
 に流がれ市街繁華、人口一萬四五千、郡役所、區裁判所、警察署、郵便
 局は室町に、電信局は米町に、病院は室町に、豊陽銀行は綿町に、第八
 十七國立銀行支店は室町にあり、篠崎村の製紙會社は數百の職工
 を使役して、新聞紙其他各種の紙類を製造し居れり、社長は小室信
 夫氏、主監は橋本實躬氏なり、九州鐵道會社の鐵工場は板櫃村に設
 けられ、島村光津の主管にかゝる赤瓦の蓮門教院は、善くても悪く
 ても小倉の名物、建築宏大を極め、邸内の園廣く高さ丈餘の蓮門妙
 法塔聳ちぬ、紫川河口の舊臺場は納涼に適す、旅館の重なるは、室町
 の遠見、寶町の近藤、船頭町の藤井及び廣田、歌舞の菩薩には川竹の
 流を酌む朝日町、この重なる旗亭は、關初、紫水、千帆、旭等なりと承

市中案内

はる坂村延明寺は長州豊前の古戰場、足立村福聚寺は舊藩主の菩提寺、櫻の名所清水寺は小倉を距る一里半細川忠興の城趾なり。小倉驛に還り九州鐵道の車窓に大里、白木崎帯の如き長街赤間關を眺めて門司に至るべし、全港は赤間關とにも九州の咽喉、鹽焚く煙はいつの間にか消失せて海に浮ぶ涼船の煙たなびき、田草取る鄙の小唄も今は聞へずなりて、高樓に調べ優なる君の端唄ぞ耳を掠めぬ、是も九州鐵道の深き恩恵にして、全鐵道が日々導き來る旅客は幾百といふ數を知らず、旅館回漕問屋は更なり、商業取引頻繁を極め、戸口の増加著るし、中國各港を経て大坂に至る、商船會社の流船出帆時刻は、毎日午後三時と六時にして、豊前宇ノ島、中津、長洲行きは毎夜十二時なり、九州鐵道會社、郵便電信局、警察署等は、門司停車場を距る遠からず、門司新聞社は新聞發行の傍ら、印刷の

市中案内

注文に應じ、旅館兼廻漕問屋の重なる者は、川卯、石田、八坂、古賀、文松、延會社の重なるものは、築港會社、倉庫會社、石炭取引所、大坂商船會社、出張店、日本郵船會社、出張店、通運會社、出張店、三菱支店、三井支店にして、銀行には第八十七國立銀行及び豊陽銀行の支店あり、清瀧公園は山水の景に饒かに、料理屋の速門樓は紫明館と肩をならべて販ひ、青樓の重なるは福壽、金龍、小泉、三光にして、いづれも亭號を附せり。

門司築港は渡場に至り、六錢の切符を購ふて小蒸氣船に飛乗り、右手に城山の砲臺を仰ぎ、遙に入幡神社、刈藻神社を拜し、左手に與治兵衛、瀬戸親の敵を撃ちしてふ巖、柳島には彦島の避病院をながめつゝ、赤間關東の棧橋に着く、此處の事情は『馬關案内』の著に譲るべきも、少し記るせば、廻漕問屋には川卯、錦波樓、肥後又が重なるも

市中案内

の、大吉樓は早潮の潮流を見て酌むべく、春帆樓は日清談判に其の名高く、先帝陵には龜山神社兩町の解語花には豊前田の紅燈、なんかんと流石數百年の繁華を留めし此の地、商船の出入店舖の繁昌一々舉げて數ふべからず、案内者の某が、明治二十七八年戦役の際、筆を載せて赤間關に遊ぶこと殆んど一年、戦争の話、談判の囁に疲れし折、觀光の句あり、先づ之にて御免蒙りたし。

きぬた播つ唄なまめかし關の秋

榮枯盛衰たし苦うつや壘の浦波

壽永四年なみだの跡や平家がに

懸一羽みすそひはの寒さかな

ものいふの夢や御陵のいし一基

雨一夜かせまで吹くや阿彌陀寺

波蹴つて風しるふ吹く瀬戸の月

市中案内

大 膽 不 敵

訓 の 一 米

一に魂二に見込み
 一運二腰三拍子
 陽の極は陰
 陰の極は陽
 諸人の話に迷な
 わせるなよ急くな

相 場 者 軍

市中案内

石炭米穀取引所

商賣の活戦場たる若松石炭米穀取引所一切の事を此に紹介する前、先づ記すべしもの樹なからず、然り而して石炭の相場は最近の開始に係ると雖も、米穀の相場は久しき歴史を有せり、昔時、伏見繁昌のころ、城州八幡の宿に、三郎左衛門といへる者あり、淀川の長堤を築き、莫大の利益を得て、大坂に移り、淀屋橋南詰に居を構へ、屋敷を淀屋と呼び、十二の銀藏、四十七の代物藏を建并べ、諸物品及び米粟を商ひたるが、後に其の門前に市を建て、市民多く來集して賣買せしより、續いて米市場なるもの、創立を見るに至られり、物換り星移り、米市場は米商會所と爲り、更に進化して米穀取引所

若松石炭米穀取引所

米取引の歴史

市中案内

となり、明治二十六年、現行取引所法さへ發布せられぬ、全國有名の米穀取引所は大坂堂島、東京蠟売町、馬關東南部町の三取引所に於て、此等取引所に於る相場は、全國百數十箇所の相手を左右しつゝ、あれば、其の消息を知る極めて緊要なり。若松は素と全國比類なき巨額の石炭を集散し居れば、其の相場も亦た全國石炭の相場を左右するに足るべく、此に掛引其他の説明を要せずと雖も、米穀の相場は古來變遷多く、隨て貴ぶべきの經驗守るべきの訓誡少なからず、相場師たらん者は、米の歴史、米の需用供給、米價昇降の原因、米價を刺戟する諸般の事情に通ずるを要すと雖も、ソハ、直に曉る能はず、宜しく平生社會の活問題に心を留むべし、而して、機に臨み變に應じ、殺活擒縱、虚々實々己が見込みに向て大膽に進めよ。

市中案内

商取引商は一様なれど、目的は人に依て異なり、各々其の目的に向て仕掛け又は仕舞ふ、三ヶ月の期限内に轉賣する目的多きが常なるも、商取引商の如きは、正米受渡を目的とするなり、此の商ひは既に賣買の利益を割り出したるものなれば、損失すべき道理なきが如きも、経験なくば難し。

長思ひ入れ商ひ 米價の將來を慮り、需要供給の割合、金融運輸出入米其他の見込みを附け、二三月の後を期して賣買するをいふ、此の商ひは心落附け、一々精密の調査を經、大勢の趨向を推し、昇降何れにか見込みを立て、大膽に仕掛くべし、尤も仕掛の時損失を豫算し、買思惑に十圓十錢の期米なれば、二十錢の損失、一圓の利益と見積りて買入れ、若し不幸にして二三十錢も下落せば、損失を惜

市中案内

まず、手仕舞ふべし。然るに、幸にして三四十錢方も騰貴せば、利乗を爲し、更に十圓六十錢前後に至りて利乗し、己が予想十一圓十錢、即ち極點に達せざる内、七分の處にて悉く賣り戻すべし。然らば、一擧して利益を占めん、尤も長思ひ入れを立つるは、年に三四回に過ぎず。

思ひ入れ商ひ 長思ひ入れ商ひは、一割内外の利益を期するものなれども、期米の足取は常に一方に偏するものにあらず、四十錢昇るかと思へば、十四五錢も降り、六十錢上りて三十錢降るを常とすれば、その上りかゝり、或は下りかゝりたる時に、賣買二三十錢の利益を収めて手仕舞し、十錢前後回復したる處にて更に賣買するを利喰ひ又は擧ひ商ひといふ、素人にして屢ばするは、手数料のみ重なりて損失を招かん。

市中案内

なんびん商ひ 最初千石を仕掛けて、十銭二十銭と損分の方つき、尙ほ千石仕掛けて、價を平均するを離平商ひといふ、此の仕掛け數次に及べば、相場遂に回復して、始め損失の恐ありし米も幾分の利益を生ず、然れども、昇降激烈なれば、大傷を受けることあり、米界の將軍にして、自家の財産を賭するにあらずんば、戦勝覺束なし。

均らし商ひ 相場に通ふことあり、數日又は數週間十銭前後の間を往來して、動かず持合ふときなり、この通ひ相場長く續き、たとへば、毎日六十銭より七十二三銭の間を往來するとき、六十銭の買ひ又は七十銭の賣持ならんか、毎日利喰ひして、元直にて更に賣買出來るなれど、若し中直にて賣買したりとせば、迷惑を拓くゆゑ、六十銭か七十二三銭の處にて、直段を均らすこと怠るべからず。

品攻め及び金攻め商ひ 運輸の不便若くは凶歉にて、在米少なき

市中案内

時に乘じ、買方頻りに買ひ煽りて、賣方を窮しむるを品攻めといひ、金融逼迫若くは在米多き時に際し、賣方頻りに賣り叩いて買方を追ふを金攻めといふ、共に大手筋或は聯合軍の爲す所なれば、自然外に暴騰暴落を爲すものにて、其の極、一方より泣きを入れ、又は貰ひ米を爲し、解合ひたる後は、更に反動を生ずべく、注意すべきこといもなり。

賣買の仕掛け 入津の有無、天候の順逆のため、一時高下を生ずるも、米穀は總べて需要供給の原則に逆ふを得ず、其の變動一年に四五回を過ぎざれば、平常大に注意して、賣買の仕掛け四五度たるべし。

運氣は循環す 陽の極は陰、陰の極は陽なれば、極より極に臨まば、果斷を以て賣買し、決して他人の言説に迷ふなかれ、相場持合ふ

市中案内

見切り

ときは變動の兆なれば俄に高下することあり、酒宴勝負等に時機を失するは古人も戒むるところ。
 見切り 巧者は最初仕掛るとき、豫じめ損金を見積り、之を捨て、も痛みにならず重て仕掛るも捨る心にてするなり、故に千石仕掛けんと欲せば、先づ百石、二百石と仕掛け、見込通なれば、大胆に仕掛け、見込違はば見切るべし、無論見込なき商ひは、之を止めて大損を招くべからず。

相場師の覺悟

一に魂二に運

相場師の覺悟 門外漢が一時の暴利を攫まんとして、手を相場に出すは愚なり、然も期米に勝敗を争ひしものが、他に職業を得るよりも、立といまつて今一と勝負すること面白し、大抵相場師たらん者は、大胆不敵にして、襪縷を着け、糊を嘗むる覺悟なかるべからず。
 一に魂二に運 下り詰めたる時は、弱氣の原因のみをいひ、上り詰

禁制六ヶ條

年中商家の豫考

市中案内

めたるときは、強氣の言ひ分のみいふが、米商の常なれば、世間の噂に順着なく、其の反對に立て、勝氣を示めすべし、此の如き時は、必ず、天井か底か、來るなり、一に魂二に運の訓戒を忘るゝなかれ。
 禁制 (一)けなり賣 (二)けなり買 (三)腹立賣 (四)腹立買 (五)天井を賣らず (六)底を買はず、又は利益に利益を重ね、今後賣買せば、尙ほ一層の利得あらんとおもふ時は、却て怪我あるものなれば、必ず、一先づ手仕舞ふて、再舉の時機を俟つべし、あせるとか、急くなどは固く謹むべきことにこそ。
 月毎高下の豫考 『正月』陽の始にして、人氣高し、安ければ買ひに利あり、『二月』天井を現はし、賣方に利あり、『三月』正二月に高下して、追々低落せば、買方に利あり、されど、北國米廻航の後、底直あり、『四月』翌月高直なれば、賣方見合はす可し、『五月』新米の出、穀既に船足を

市中案内

とめ、在米減りて高直なるべし、『六月』天候に關す、尤も土用の天氣を氣構ふ、『七月』天災時節に入りたれば、許多の賣買すべからず、只だ利喰い掬い商ひの考にて、晴天に安直を買ひ、曇雨に高直を賣るべし、然れど、豐作の見越しつかば、買方は激落の後迄見合はすべし、『八月』凶歲ならずば、大抵下落すべきも、十五夜頃は底直を現はす、『九月』豐歲なれば、低落すべく買方に利あり、不作なれば、上向くべく賣方に利あり、『十月』低落して買方に利あれど、新古米不足價貴からば、賣方に利あり、『十一月』人氣安く米高し、されど、大高下なく、買方無難なり、『十二月』仕切手仕舞の月にて、一時低落せん、されど、此の低落は永續せざれば、低落のとき買ひ置いて利あり。

軍師には軍師の歌あり、相場師獨り豈に歌なからんや、左に記るす

訓歌

秋冬高下の歌

春高下の歌

は、相場師の朝夕咏すべき必要の歌なり。

順乘

秋安くから腹あがり一割半霜月下り暮上るなり
春据り四五月上り水無月と文月の米下るもの也

變乘

秋高くから腹下り一割半霜月安く暮もあがらず
春弱氣順氣の年は五月下げ水無月文月上る者也

秋冬の高下を示めせる歌は、

順乘

古米多く豊年と見る安米は空腹上の年と知べし

變乘

古米少く強變が出て高米は空腹下の年と知べし

春の高下を示めせる歌は、

順乘

春上げと見て買上る冬の米春は中々高くなるまじ

變乘

春下げと見て直の安き冬の米春は中々安くなるまじ

春三月大高下なき据り順高き日は賣れ安き日は買へ

市中案内

市中案内

夏の高下を示めせる歌は、

順乗のどしはきはめて五月上旬五月下旬は變乗の年
大法はあき名月がやす時五月下じゆんが高か時なり
年あけて春から五月高米は水無月文月さがるとし也
年あけて春から五月やす米は水無月文月上る年なり
又た一般の高下を示せる歌及び訓歌は、

萬人が萬人乍ら弱氣なら上べき理をふくは米なり
千人が千人乍ら強氣なら下るべき理をふくは米なり
萬人が呆れ果たる直が出れば其が高下の界なりけり
洪水と大風吹の飛上りは阿房になりて畑のたねまけ
萬人が心に迷ふ米ならばつれなき道へ赴むくが善し
賣買の徳に乗りたる商は半扱ひにすくい場を知れ

市中案内

賣買をせかず急かす待つも仁徳の乗る迄待も仁なり
賣買を一度にするは無分別二度に賣べし二度に買べし
上る理も時至らねば上らぬぞ勢ひ買をして悔むまじ
下る理も時至らねば下るまじ賣せきするは大たわけ也
買せきをせぬが強氣の秘密なり何時でも安き日を待て買へ
賣せきをせぬが弱氣の秘密なり何時でも高き日を待て賣れ
向ふ理は高きを賣て安を買へ米あきないの大秘密也
五月米人氣よわくて直は上る子々孫々迄賣りは禁制
すはりには三年二乗半あつかい高安どもに平乗禁制
いつとても買落城の弱とふけ畏い所を買ふが極意ぞ
いつとても賣落城の高とふけ安い所を賣るが秘密ぞ
* * * * *

市中案内

相場師が古來心を痛むる天氣は、天氣豫報に依りて、今は之を察知することゝなりしも、参考の爲め、傳説を左に掲ぐ

(一)朝焼け橙黄なれば風鮮麗なれば晴、(二)春秋、日出の色青白なれば風雨、(三)旭色青白、村雲立ち、光線遠く一方に發輝するは烈風雨、(四)朝虹の鮮明なるは霖雨の兆、夕虹は早五極めて赤き夕焼けは早時として風あり、赤黒なるは雨、(六)日の暈鮮麗なるは晴、稀薄なるは雨、暗濁なるは風、(七)月の暈は雨、暈の中に星あれば晴、(八)満天の星きら／＼するは、大風近かし、(九)天に一點の雲なきは雨近かし、(十)朝雲の薄黒きは晴、赤きは風雨、(十一)雲の捲き走るは風の兆、烟の如く見へて消るは晴、(十二)雲の西へ走るは雨、(十三)露又は霜の多きは晴、(十四)梅雨中の雷は晴れ、(十五)山の遠く見ゆるは晴、近く見ゆるは雨なりといふ。

イザ、是より愈よ若松石炭米穀取引所の御案内いたさん、全取引所の資本金は四萬五千圓、而して石炭は、明治二十九年五月一日より開業せられ、本年米穀をも加へ、三月五日より開業せられたり、其の役員は、

理事長 久保太郎 理事 金子辰三郎 全 的野半介 全

和田喜三郎 監査役 小野孫一 森 滋
にして仲買人は左の如し

⊕ 藤井 俊平 ⊖ 西原 又吉 ⊕ 大賀八右衛門 中松任 直吉
× 松川駒次郎 ⊕ 占部縫次郎 可和田象太郎 全澤岡 周八
⊖ 遠藤 平藏 ⊕ 松本 松平 宗像隣太郎
仲買人組長は、一ノ組長藤井俊平、二ノ組長和田象太郎なり、而して、

市中案内

市中案内

休業は日曜日及び大祭祝日にして、月の末日は氣配立會として、一
 場限り開業す、偕て、石炭の種類は營業細則の項に譲り、其の證據金
 表を、左に掲げん。

定期取引直取引	延期取引
石炭一萬斤賣買代價一口五萬斤に付	石炭一萬斤賣買代價一口五萬斤に付
自一圓至二圓九九錢 金七圓	自一圓至二圓九九錢 金九圓
自三圓至四圓九九錢 金八圓	自三圓至四圓九九錢 金十圓
自五圓至六圓九九錢 金九圓	自五圓至六圓九九錢 金十一圓
自七圓至八圓九九錢 金十圓	自七圓至八圓九九錢 金十二圓
自九圓至一〇圓九九錢 金十一圓	自九圓至一〇圓九九錢 金十三圓
自一圓至二圓九九錢 金十二圓	自二圓至三圓九九錢 金十四圓
備考 餘は之に比準す	備考 餘は之に比準す

又た手数料は、左の如し。

市中案内

定期取引	延期取引
石炭一萬斤賣買代價	石炭一萬斤賣買代價
既入口五萬斤に付	未入口五萬斤に付
自一圓至二圓九九錢 金十七錢五厘	自一圓至二圓九九錢 金十一錢五厘
自二圓至三圓九九錢 金十八錢五厘	自三圓至四圓九九錢 金十二錢五厘
自三圓至四圓九九錢 金二十錢五厘	自五圓至六圓九九錢 金十三錢五厘
自四圓至五圓九九錢 金廿一錢五厘	自七圓至八圓九九錢 金十四錢五厘
自五圓至六圓九九錢 金廿三錢五厘	自九圓至一〇圓九九錢 金十五錢五厘
自六圓至七圓九九錢 金廿四錢五厘	自一圓至二圓九九錢 金十六錢五厘
自七圓至八圓九九錢 金廿六錢五厘	自三圓至四圓九九錢 金十七錢五厘
自八圓至九圓九九錢 金廿七錢五厘	自五圓至六圓九九錢 金十八錢五厘
自九圓至一〇圓九九錢 金廿九錢五厘	自七圓至八圓九九錢 金十九錢五厘
自一〇圓至一〇圓九九錢 金三十錢五厘	自九圓至一〇圓九九錢 金二十錢五厘
自一二圓至一二圓九九錢 金卅一錢五厘	自一二圓至一二圓九九錢 金廿一錢五厘
自一二圓至一二圓九九錢 金卅三錢五厘	自一二圓至一二圓九九錢 金廿二錢五厘
備考 餘は之に比準す	備考 餘は之に比準す

延取引直取引に係る證據金又は入札賣買の場合に於て賣買主其賣買を取消したるときは
 本手数料半額とす

市中案内

又九仲買口錢は、左の如し。

代	定期	取引仲買口錢	
		既入口五萬斤に付	未入口五萬斤に付
一	一圓蓋	金三十四錢五厘	金十七錢五厘
一	二圓	金三十七錢五厘	金十八錢五厘
一	三圓	金四十錢五厘	金二十錢五厘
一	四圓	金四十三錢五厘	金廿一錢五厘
一	五圓	金四十六錢五厘	金廿三錢五厘
一	六圓	金四十九錢五厘	金廿四錢五厘
一	七圓	金五十二錢五厘	金廿六錢五厘
一	八圓	金五十五錢五厘	金廿七錢五厘
一	九圓	金五十八錢五厘	金廿九錢五厘
一	十圓	金六十一錢五厘	金三十錢五厘
			延取引直取引仲買口錢
			一口五萬斤に付
			金四十六錢
			金五十錢
			金五十四錢
			金五十八錢
			金六十二錢
			金六十六錢
			金七十錢
			金七十四錢
			金七十八錢
			金八十二錢

此に米穀の部に移り、受渡米品位格付表を左に掲げん。

受渡米品位格付表

- 一 定期賣買の建米は三等品位の筑前中米とす
- 一 本表の建米は明治廿九年の産米たるべし
- 一 本表に掲ぐる格付は一石に對し其價格を示すものなり
- 一 代米に供用すべき賄國米は其品位を五等に分ち價格を豫定す
- 一 不定格米は當地方に回米稀少なるに付若し之を代米に用ふるときは實米検査の上其價格を定むるものとす
- 一 今招米は産出の年度と銘柄等に拘らず現品調査の上價格を定む
- 一 改良米は調査の上其の改良の成績著名なる者は既定格付外特に價格を進むることあるべし
- 一 建米に對し一石に付金七十錢以上格下げに當るものは受渡に用ひず
- 一 明治廿八年産米は廿九年産米の價格に同ト
- 一 明治廿七年産米は現品調査の上其價格を定む廿六年以前の産米は受渡に用ひず
- 一 門司に於て渡米をなすものは一石に付金十一錢運賃雜費として割引をなさしむ

市中案内

市中案内

一 渡米は總て四方掛俵に限るべし若し立繩なき分は其受渡場所に於て四方掛俵に仕直し受渡をなさしむ八貫目以下の輕俵は受渡の數に採用せず

一 此の表は明治三十年二月限より實施す

一 此の表を改正するときは其期月賣買開始前に定むべし

一等品位	二等品位	三等品位	四等品位	五等品位
十一錢より格上げ 三十錢まで格上げ 筑前上々米 豊前上々米 肥後上々米	十錢より格上げ 十錢まで格上げ 筑前上米 豊前上米 肥後上米 肥前上々米 筑後上々米	全格 筑前中米 豊前中米 肥後中米 肥前上米 筑後上米 豊後上々米	一錢より格下げ 四十錢迄格下げ 筑前下米 豊前下米 肥後下米 肥前中米 筑後中米 豊後上米	四十一錢より格下げ 七十錢まで格下げ 肥前下米 筑後下米 豊後中米

不定格

不定格の部は左の如し。

定期取引
證據金

手数料

出雲米	因幡米	伯耆米	越前米	越後米
越中米	長門米	周防米	加賀米	能登米

又た、定期取引證據金額表は左の如し。

米一石に付賣買代價	一口五十石に付	米一石に付賣買代價	一口五十石に付
金六圓未滿	金十五圓	金七圓未滿	金二十圓
金八圓未滿	金廿五圓	金九圓未滿	金三十圓
金十圓未滿	金卅五圓		

備考餘は之に準ず

又た、定期取引手数料は左の如し。

米一石に付賣買代價	既入口五十石に付	未入口五十石に付
六圓未滿	金四十五錢	金三十二錢
七圓未滿	金五十三錢	金三十七錢

市中案内

市中案内

備考	八圓未滿	金六十一錢	金四十二錢
	九圓未滿	金六十九錢	金四十七錢
	十圓未滿	金七十七錢	金五十二錢
備考	餘は之に準ず		

又た定期取引仲買口銭は左の如し。

備考	米一石に付賣買代價	既入一口五十石に付	未入一口五十石に付
	六圓未滿	金四十五錢	金三十二錢
	七圓未滿	金五十三錢	金三十七錢
	八圓未滿	金六十一錢	金四十二錢
	九圓未滿	金六十九錢	金四十七錢
	十圓未滿	金七十七錢	金五十二錢
備考	餘は之に準ず		

序に、登記法要領を記るるに、地所、建物、船舶の賣買譲與質入書入に付、登記を爲すべき概目は、

(一)地所は郡區町村名、字、番地、地目、反別若しくは坪數地券面の價格(二)建物は郡區町村名、字、番地、地目、構造の種類、建坪、雜作の有無(三)西洋形船舶は汽船、風帆船の區別、船名、船號、登簿噸數、公稱馬力、汽機及汽船の種類、端船其他必要の處(四)日本形船舶は船名、番號、積石數、噸數其他必要の處(五)登記の事由(六)金額(七)質入書入は其期限及利息(八)所有者及登記を受ける者の氏名住所(九)一筆の地所又は一枚の建物を區別し賣買譲與、質入、書入を爲すときは其事實(十)二番以後の書入を爲し又は書入に爲したるものを質入と爲すときは其事實(十一)登記の年月日

○右に付其買讓り受人は左の價格區別に従ひ一件毎に左の印紙を貼用すべし

賣買金高又は讓與時價 (印紙高) 金五圓迄 市中案内
 賣買金高又は讓與時價 (印紙高) 金五圓方金十圓迄 金五圓 市中案内
 賣買金高又は讓與時價 (印紙高) 金十圓 市中案内

市中案内

金十圓方二十五圓迄	金廿五錢	金五百圓方金七百五十圓迄	金六圓
金廿五圓方金五十圓迄	金五十錢	金七百五十圓方金千圓迄	金七圓
金五十圓方百圓迄	金一圓	金千圓方金千五百圓迄	金八圓
金百圓方金二百圓迄	金二圓	金千五百圓方金二千圓迄	金九圓
金二百圓方金三百圓迄	金三圓	金二千圓方金五千圓迄	金十圓
金三百圓方金四百圓迄	金四圓	金五千圓方金一萬圓迄	金十一圓
金四百圓方金五百圓迄	金五圓	以上金高五千圓毎に印紙二圓増	

○登記事件の取消又は其變更、原本又は拔書、若くは登記の一覽を請ふ者は手数料として金五錢を納むべし

* * * * *

郵便税

郵便税は左の如し。

◎第一種 書狀(重量二匁毎に)二錢 ◎第二種 郵便葉書一錢、往復全二錢 ◎第三種 定期刊行物及其附録一號一箇(重量十六匁毎に)五厘、二號又は二箇以上一束(全上)一錢 ◎第四種 書籍、帳簿、各種印刷物、寫眞、書畫、營業品、見本及雛形、農産物種子、給圖、紙(重量卅匁毎に)二錢 ◎書留郵便物は何程に拘はらず手数料六錢

普通爲替料

通常郵便爲替料は左の如し。

◎爲替證書一枚金高三十圓を限り端数は厘位を限る ◎爲替料は五圓迄四錢、十圓迄六錢、廿圓迄十錢 ◎卅圓迄十五錢

小爲替料

郵便小爲替料は左の如し。

◎證書一枚金額三圓以下端數厘位を限る ◎爲替料は三錢 ◎効用は證書日附より六十日間

新編若松案内 終


市中案内

市中案内

貯蓄は獨立の基礎
 機敏の商人は廣告を見る
 疎くに追付く貧乏なし
 延引は時間の賊
 疎なく疎て奇麗に暮せ
 地下六尺尊卑無し



(一) 後封

TRADE  MARK

價 廉 品 精
國 各 米 歐
商 貨 雜

目 丁 三 町 本 松 若
店 物 洋 田 安

(後付の三)

神才問其他
諸大家賣藥并ニ化粧旬品一切

萬國藥種商

醫用諸器械洋酒類繪具
染料漆金箔類大販賣店

若松港新地町壹丁目角

阿部支店

香月明治

(後付の二)

(後付の四)

◎古書畫◎蒔繪物◎金屏風◎其他
珍器類種 松花堂

大方諸彦の御眷顧を蒙り店運益々隆盛に赴き候段奉深謝候自今尙
一層物品を精撰し誠實勉強を以て手廣く御注文に應じ候間倍舊の
御引立奉願候也

若松本町三丁目

骨董商 末松商店

(後付の五)

船具○ろかい○すつぱん○なんば製造販賣●筑豊鐵道會社、若松築港會
社、筑豊遠洋漁業組合、三菱會社、住友商店諸會社用達

若松港辨財天通

櫓木用材堅木類買入并全品卸賣
ろ萬事 濱田萬次郎

弊店儀開業以來江湖諸彦の深厚なる御眷顧を忝ふし日に月に
繁昌に赴き候段奉鳴謝候陳者自今一層勉強仕藥品の精撰は申
迄もなく各種の品類一切賣捌き諸彦の御便利を充分相謀り可
申候間倍舊の御引立伏て奉願候

◎營業課目◎

和漢洋藥種國各有名賣藥
醫療器械寫真用藥品

洋酒類繪具染料
罐詰物化粧芳香品

◎製劑◎

人參サフラン湯赤玉小原丸
外用ヨシユムチンキ
目藥精錡水
致新膏

若松本町
四丁目

前田朝日堂藥舖

廣告

各國漆器建具卸小賣商

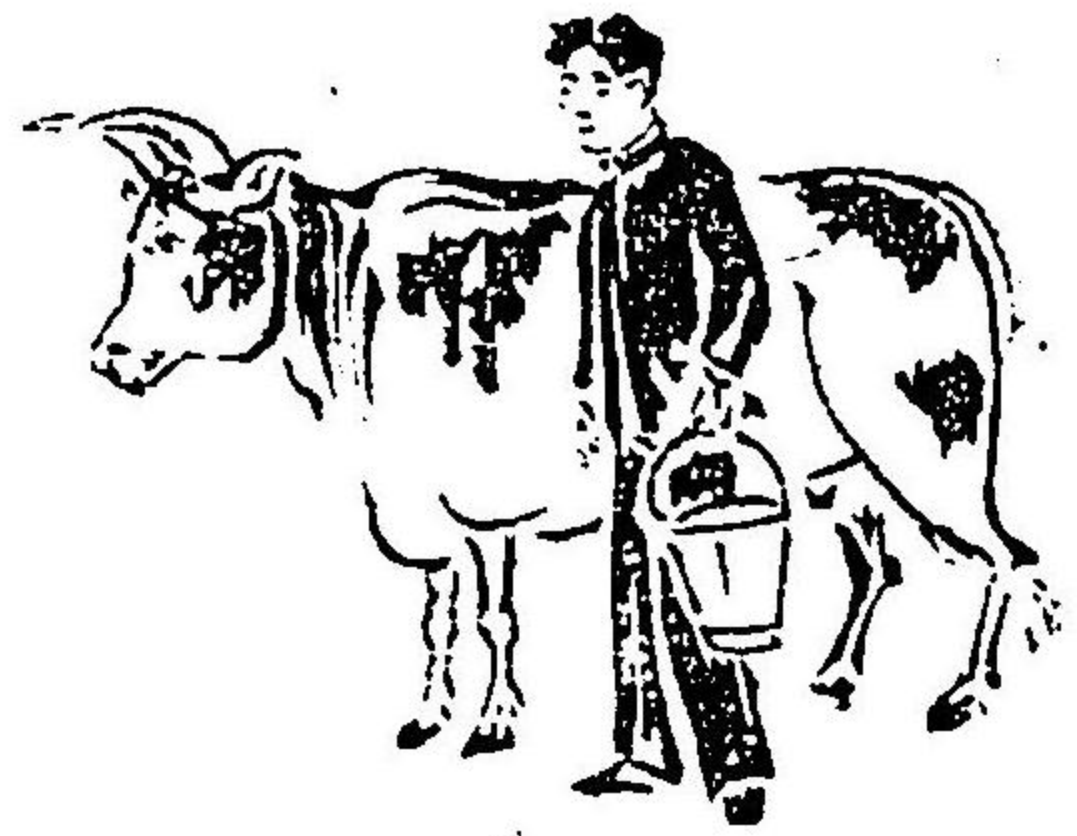
其他家具一切御注文に應ず

筑前國若松港本町五丁目

三有村善次郎

(後付の八)

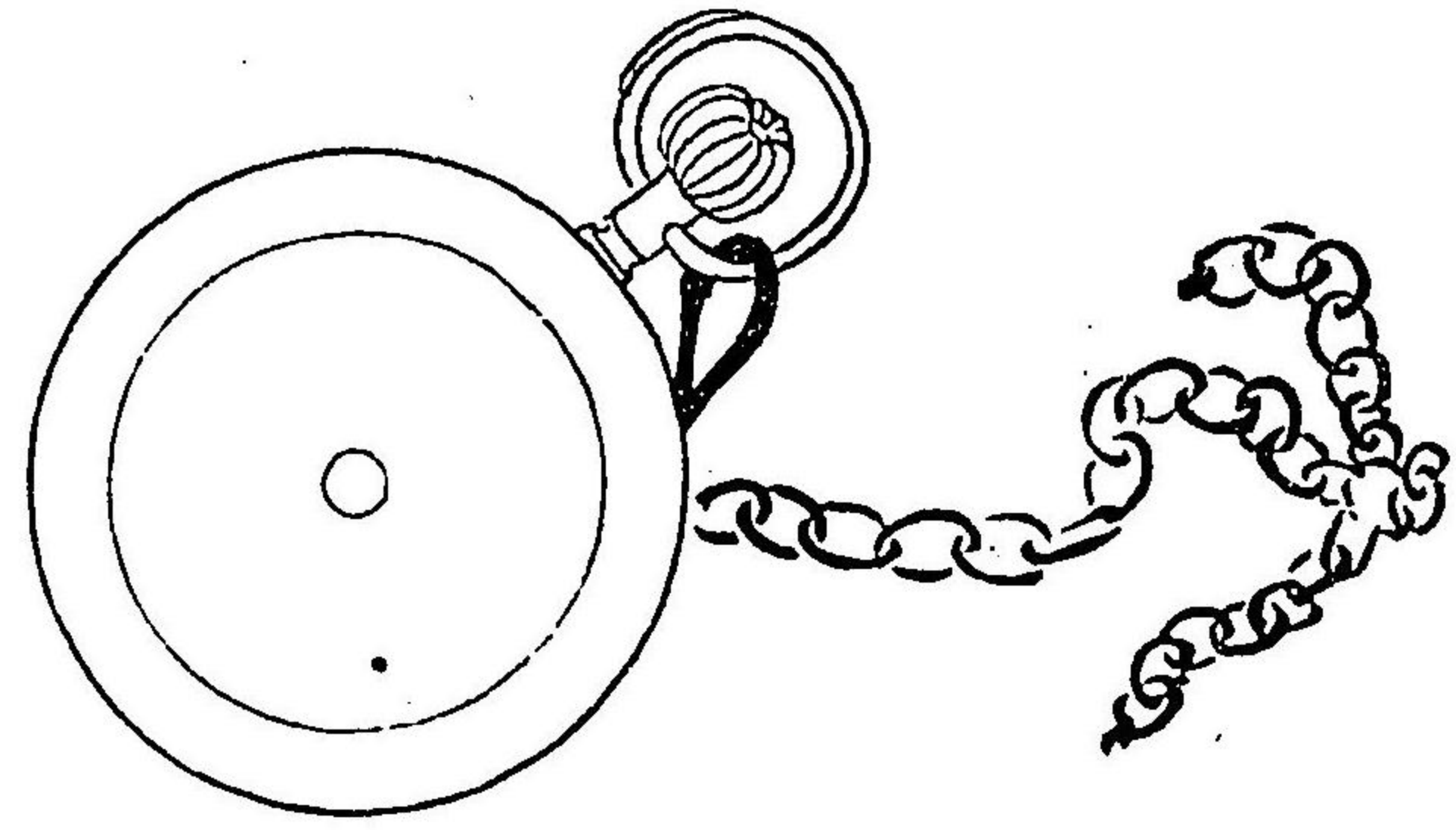
星野製乳園



若松港的野精米所の西側

(後付の九)

計時銀金
商賣小卸



弊店販賣の時計御
不用の節定約四ヶ
月迄は現金二割四
ヶ月より八ヶ月迄
は二割五分八ヶ月
より十二ヶ月迄は
三割引にて斯期日
中に持參の御方は
右割引を以て現金
に御引替申上候也
但し破損等の節は
此限に非ず

(後付の十一)

町地新松若

店商田鶴

茶用
御菓子

若松港本町四丁目

山本竹次郎

並に
鶏卵素麵御調進

(後付の十)

諸新聞雜誌取次
學校用教科書
新版小說其他賣捌

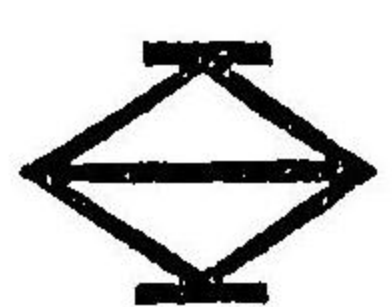
若松港本町四丁目

加部支店

小倉町米町二丁目

加部本店

筑豊各坑石炭直送販賣所



石炭商 鈴木捨喜知

大阪北區安治川通北貳丁目

榮町四丁目

神戸代理店 三好松太郎

河原町通三條下ル

京都特約店 鈴木茂助

世界的の大新聞

日刊

國民新聞

定價 一枚 二錢
一ヶ月 四拾錢
郵便料 一ヶ月十三錢

議論公平、報導正確。常に活氣あり、而して奇狂ならず。
大日本、大國民、新商人の正實なる指導者、忠良なる友人
たるものは我國民新聞なり。

發行所

東京市京橋區
日吉町四番地

國民新聞社

ことわざの園

黄金は塵埃の裡にもあり、石炭は土砂の間にもあり、浮世の眞理のみ、四角張った青表紙にあらんや、賤が家の櫓に咲く花も、九重の雲に翳さず花も、美に於て差別あらふ筈なし、只だ嘉言のゴツ／＼たらんより、言の柔らかく百人が百人の理解を得るに如じ。此に諺の園に御案内いたすは、一寸一喫煙の御愛嬌。

『い』◎一は萬物の始り◎一功よく萬論をふせ
◎一身の品行は其の危難を防ぐ◎一隊の兵馬より勝れり◎一年善ならざれば七年の憂を招く◎一鐘を偷約したるは一鐘を賭けたるなり◎一

ことわざの園

失ある妻を拒んで二失ある妻を娶る◎色、人を迷はさす人、色に迷ふ◎一寸延れば毒のびる◎一文惜みの百損◎怒るは敵を思へ◎印形は首を釣替へ◎念のばは延遅れ。

ことわざの圖

『ろ』 ◎論に負けて實に勝て◎論より證據。
 『は』 ◎繁昌の時に用心、不仕合の時に辛抱◎
 鉄さ奉公人は使ひ様による◎繁昌の地には草
 生へず◎流行は廢れる◎博奕は勝てば仕度、負て
 も仕度し。
 『に』 ◎二兎を逐ふもの一兎も得ず◎逃がれぬは
 大きく見へる◎憎い處にも餌をかへ◎二、八月
 は船頭の喧み時。
 『は』 ◎朋輩の交を結ぶ前に汚づ其の人と共に
 一俵の鹽を背むべし◎暴風に遭はざれば船長の
 熱練を知る能はず◎はつ／＼三年波八年。
 『へ』 ◎拙手な鍛冶屋も一度は名剣。
 『と』 ◎問ふは當坐の耻、問はぬは一代の耻◎得
 失は一朝榮辱は千歳◎賤の財を奪へるな

◎時の役人、日の奉行。
 『ち』 ◎ちいさくとも針は吞まれぬ◎治に居て亂
 を忘るな◎地獄の沙汰も金次第◎地獄にも知る人
 あれ。
 『り』 ◎利子を取らんより利子を拂ふな◎兩葉に
 して断されば終に斧を用ふるに至る◎兩方聽て
 下知なせよ。
 『ぬ』 ◎盗人の隙あれど守人の隙はなし◎濡れぬ
 先こそ露なも厭へ。
 『る』 ◎類を以て集と◎るりも玻璃も照せば光
 る。
 『な』 ◎面白盛に遊を止めよ◎男は敷居を
 跨れば七人の敵あり◎岡目八目◎教へるは學ぶの
 半。

ことわざの圖

『わ』 ◎我が用なき物を買ふ人は遂に必要の品を
 賣る。
 『や』 ◎金は火に當て知られ友は事に隨んで顧
 みる◎金の鑛は如何なる月でも開く◎観願は最善
 の教師◎學問は金庫、練習は繩◎堪忍五兩、夏三
 兩。
 『よ』 ◎善き報知の人は遠慮なく月を叩く◎世に
 馬鹿な縁業なし唯だ馬鹿な客あるのみ◎用心
 は腹痛にせよ。
 『た』 ◎大勝は己に克つこと◎怠惰は不幸の母
 ◎膽略と決心とは積徳の精神◎他人の飯には骨
 がある。
 『む』 ◎融通ればへつらいことになる。
 『そ』 ◎損して得なこれ。

『つ』 ◎月露花は一度に眺められず◎使ふは使
 はるい。
 『ね』 ◎念力は岩なも買す◎念には念押せ。
 『な』 ◎汝名譽欲しければ太陽に殿床を見する
 な◎七轉八起。
 『ら』 ◎樂は善の種、善は樂の種◎落花枝に
 へらす。
 『む』 ◎無饑大食◎無理の通れば道理引込む。
 『う』 ◎馬士、船頭、お乳の人◎賣物には花を飾
 れ。
 『の』 ◎能ある鷹は爪をかくす◎登ること愈よ
 高ければ落るこいよく深し。
 『く』 ◎善を以て樂とせば成功其の身に隨ふ◎
 空な希望を失ひし人は大に得したるなり◎口

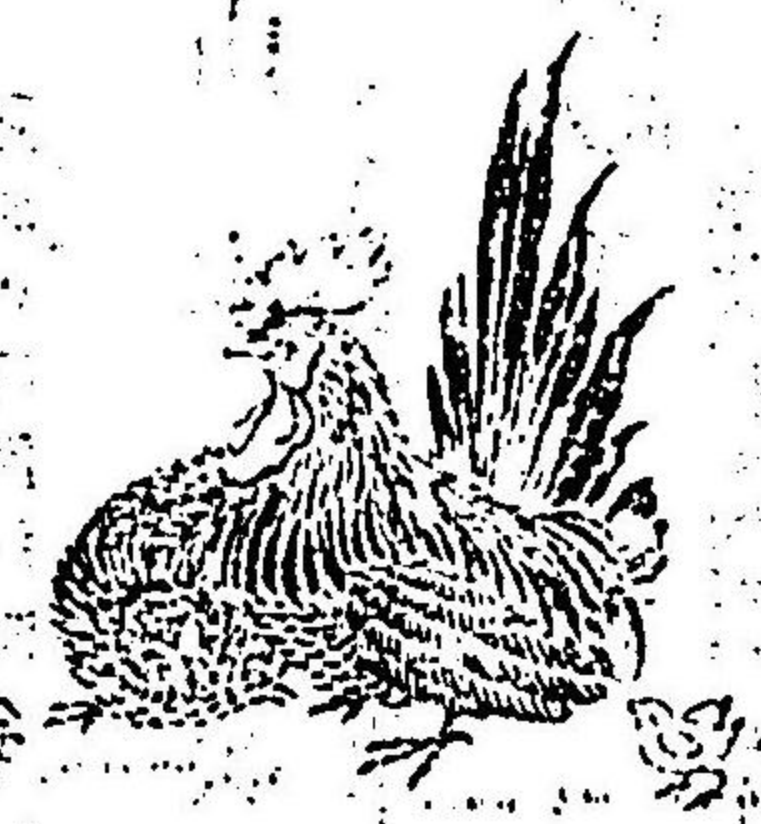
ことわざの圖

には使はれる。
 『や』 ◎ 柳に雪折なし ◎ 安物買ひの銭失ひ。
 『ま』 ◎ 待てば甘露の日和あり ◎ 負けるは勝つ。
 『け』 ◎ 下司の一寸のう間の三寸、白痴の明放し。
 『ふ』 ◎ 不精者の節句働き ◎ 振られて踊る果報者 ◎ 風雪を経ざれば春に遇はず ◎ 魚を淡むより網打つ。
 『こ』 ◎ 轉ばぬ先の杖 ◎ 志は松の葉 ◎ 心に思ふて舌に隠れ。
 『え』 ◎ 顔の花にははす ◎ 醫師と代、買入の手にくれば白いもの直ぐに黒くなる ◎ 遠慮ひたるし伊達寒し。
 『て』 ◎ 亭主の勘辨、女房の辛抱 ◎ 天下廻り持

◎ 出る杭は打る。
 『あ』 ◎ 悪事千里を走る ◎ 朝寝の背感ひ ◎ 明日は明日の風吹く ◎ 案するより産むが易し。
 『は』 ◎ 三十振薙、四十島田 ◎ 山椒は小粒でも辛し ◎ 辛や三年櫛が三月 ◎ 酒は憂の玉符 ◎ 財布の底と心の底を人に見すな。
 『き』 ◎ 昨日は今日の昔 ◎ きれでも錦 ◎ 扇鼠、猫をむむ。
 『ゆ』 ◎ 油斷大敵 ◎ 任大名に歸を食。
 『め』 ◎ 青人も京へのぼる ◎ 名馬には蹄あり。
 『み』 ◎ 三ツ子の魂、百造 ◎ 店を開くは易く、店を守るは難し。
 『じ』 ◎ 信友と驢馬は險路に至りて人を助く ◎ 思慮は老ひたるを、貴び手足は若きを、貴ぶ ◎ 人生

ことわざの圖

の大發は時間を費すにあり ◎ 百出物を賣めた人は買はず ◎ 知らずば半分値 ◎ 疾病は遊蕩の租税 ◎ 人業を保てば、業人を保つ。
 『ひ』 ◎ 美服はよき紹介 ◎ 人の口には舌が立てられぬ ◎ 人増せば水増す ◎ 人を許すとも、己を許すな ◎ 人は人らしくせよ。
 『も』 ◎ 持た癖はかくせぬ ◎ 物は相談 ◎ 最も甘き葡萄は高き處にあり ◎ 目的の港を定めざる船に順風なし。
 『せ』 ◎ 銭金は他人 ◎ 怠いでは事を任損する ◎ 千斤の法律一斤の慈愛なし ◎ 錢を許く人は貧乏を刈取る ◎ 千里も一ト足より ◎ 錢は耳なくして聞く ◎ 小敵を見て侮るな。
 『す』 ◎ 秤が身を食ふ ◎ 隙間から来る風は寒し。



明治三十年十二月廿二日印刷
明治三十年十二月廿五日發行

正價二十八錢

著者兼
發行者

辰巳豐吉
東京區日寺町四番地寄留

印刷者

山本鉄次郎
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

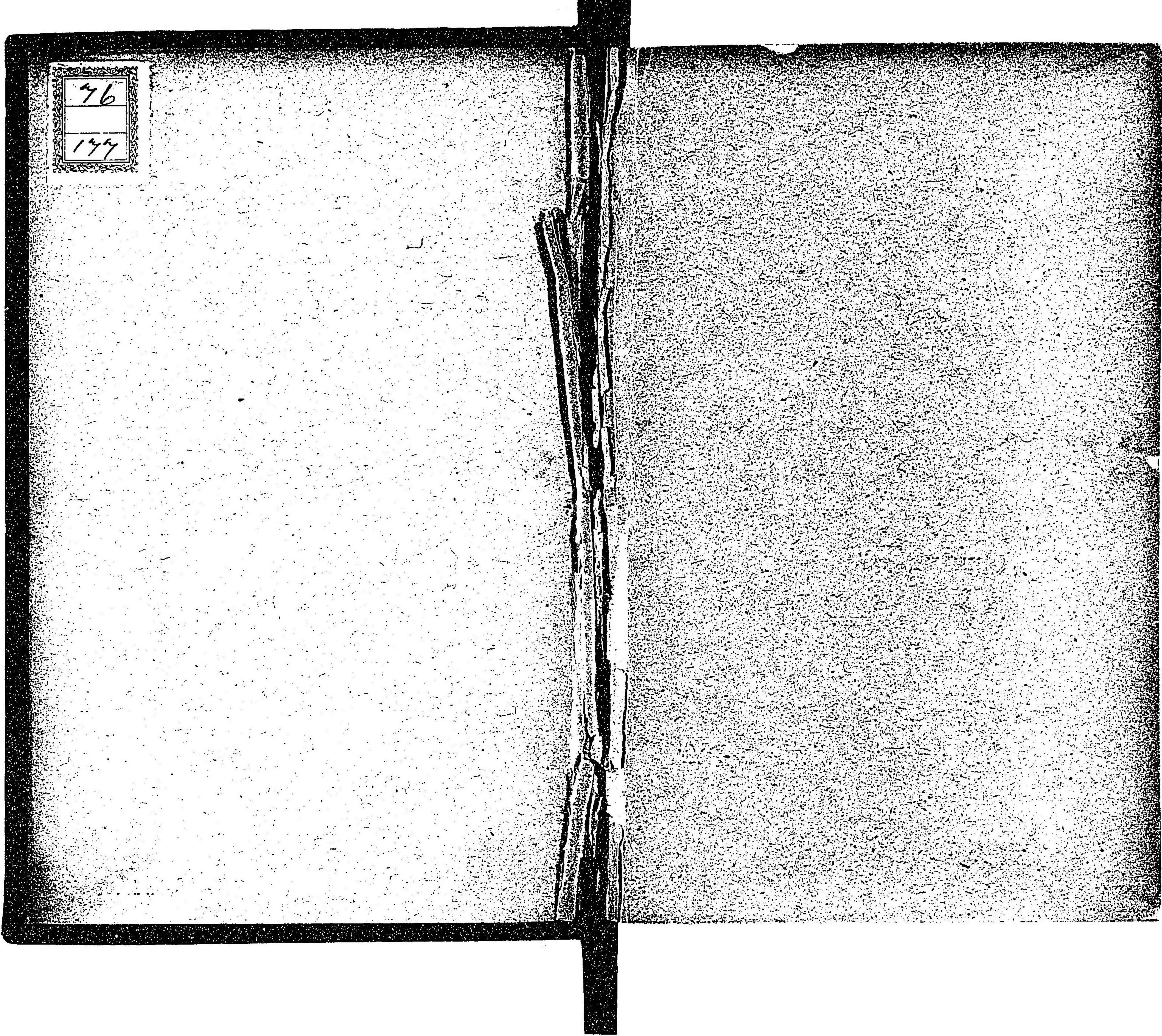
印刷所

株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

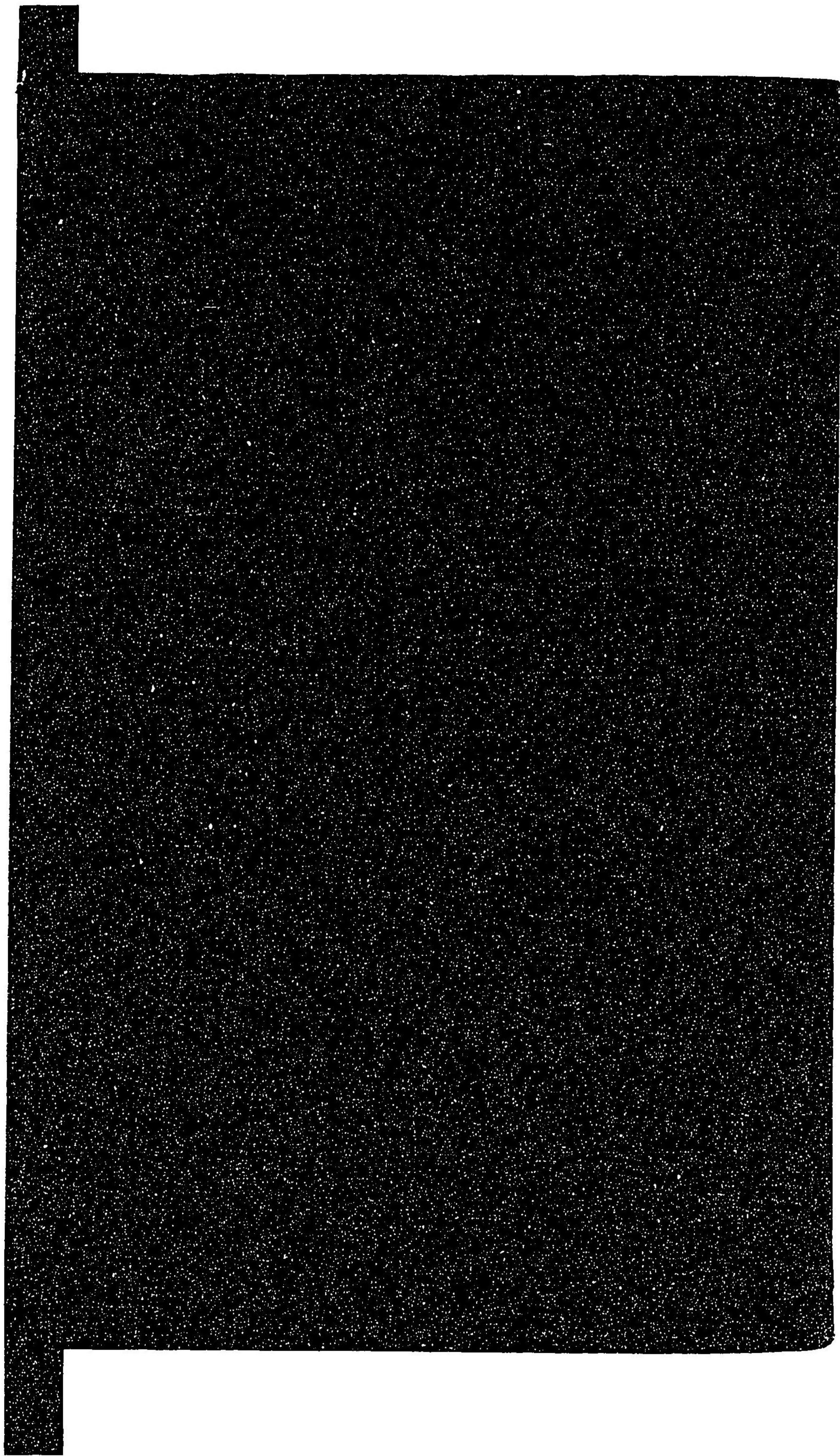
發賣所

加部支店
福岡縣遠賀郡若松町字本町四丁目

29/10/34



76
144



026223-000-6

76-177

新若松港

辰巳 豊吉(敬民)/著

M30

ADC-3947



